I　調査対象地域の植生概観

調査対象地域とされた武蔵丘陵森林公園予定地は、埼玉県比企郡滑川村と熊谷市にまたがる東西４キロメートル、南北10キロメートルにおよぶ、およそ306ヘクタールの敷地面積を有している。この南北に長くのびた海抜高度40～90メートルのなだらかな丘陵地帯は、南がゆるやかで、比較的起伏が大きい北寄りの丘陵につづく。また沖積低地に接する谷部には灌漑用の溜池が数多く点在しており、この地区の一つの特徴となっている。台地を構成する洪積層は中新統比企層群の基盤の上に堆積した武蔵野ローム層、立川ローム層の数メートルの火山灰層からなっているが、西から北にかけての地域はローム層が浅く30センチメートル内外の地域も見うけられる。

現存する植生や土地利用の形態は多摩丘陵台地上に数百年来見られたもっとも一般的な状態を示している。クヌギ―コナラのいわゆる雑木林、アカマツ植林、アズマネザサ―ススキ草原などが、斜面や台地上を被っている。農耕地は主に沖積低地やなだらかな斜面上および一部台地上にも見られる。これら現在の植生や土地利用の形態は、長い時間をかけて経験的に台地上、斜面、沖積低地という地形区分のそれぞれに対応して行なわれている。北寄りの起伏の大きい台地上では耕地は少なく、ほとんどがアカマツ植林や、あるいは薪炭林などとして利用されてきたクヌギやコナラの林で占められており、斜面の下部や谷部ではこの地方の主要産業であった養蚕業用の桑畑が見られる。南部のなだらかな台地上は、やはり大半はアカマツ植林とクヌギやコナラの林であるが、沖積低地に面した距離的に農家に近い斜面はよく耕作地や桑畑として利用されていた。しかし公園計画に伴いこれらの耕作地は最近放置されて、路傍生の植物種群で構成されるいわゆる雑草群落で占められている。とくに好窒素性のヒメジョオンやヒメムカシヨモギの群落が目立っている。また谷部に位置する河川ぞいの狭い平坦地や沖積低地は、多くは水田として利用されてきたものであるが、やはり近年放棄されてコアゼガヤツリ、ヒデリコの湿生植物群落が発達している。しかし水田として利用されえなかったより狭い谷部には、高木層にハンノキの優占する林分が見られる。また公園予定地域内の各所に多数点在する沼のまわりには一部カサスゲやウキヤガラ、カンガレイ等の挺水植物群落が見られ、特異な群落を構成している。このような人に利用され得なかったきわめて限られた狭い地域にのみ自然植生に近い群落がみとめられるが、全般的には厳密な意味での自然植生はみられない。